
LIFE OF のらねこ

幼ゐこみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L I F E O F のらねこ

【Nコード】

N 4 2 2 2 L

【作者名】

幼るこみ

【あらすじ】

時計台を中心に、十六の夜の名を持つ通りのある町。その町で野良生活をしている「あたし」と、他人には見えない生意気な「相棒」の日常。

※アルファポリス様でメルマガとして配信していた作品です。私情により、今後の配信が安定しなくなったので、こちらでゆっくりと投稿いたします。（5エピソード予定）

1. 名前

1.

人と人が出会った時、まずは自己紹介をするだろう。そうして、お互いを探り合い、新たに生まれた関係をどうしたら良好なものに出来るのかを考えながら、話をするわけだ。その手段として、つまり、他者と近づく第一歩として、大抵の人は自分の名前を紹介する。「お名前は？」

「わたくしは〇〇と申します」

直接的に問われなくとも、ああ、名乗らなくてはならないなという意識が生まれてきたりする。また、人づてで知り合った時なども、「こちら、××の〇〇さん」などと、名前は人間関係において、必要最低限のものらしく扱われたり、そうしなければならぬ雰囲気まで常に漂っていたりするような気がする。

あたしはこの雰囲気苦手だ。苦手というか、困惑してしまう。あたしだって、沢山の人に出会って、沢山の人と関係を築いていたりもする。だから、やっぱりこの自己紹介というアプローチとぶつかることになるのだが、いつも困惑してしまい、妙な緊張が走る。たぶん、この緊張は多くの人に理解されないだろうなと自分でも思う。また、誤解されるだろうなとも思う。あたしは別に、名前を知られたくないわけでもないし、他者との関係を築きたくないわけでもない。出来れば、人脈はあったほうがいいし、関係が開かれれば開かれるほど、色々な機会が舞い込むということも知っている。それなのに、名前を知られたくないだなんて、叩けば埃でも出てくるのかしらとか思われそうだが、断じて違う。

あたしが自己紹介につまずく原因はもっと単純明快だ。

つまり、あたしが、自分の名前を忘れてしまったからに過ぎない。かといって、名前を問われた時に、「ああ、忘れました」だなん

て答えるわけにもいかないだろう。そんなこと答えたら、相手の方が非常に困惑するだろうし、あたしの人脈も一向に広まる気配がな
いままに終わるだろう。

あたしはこの事で結構苦勞しているのだ。

今までは、適当な苗字としてひとつ名前を思い浮かべて、それを
相手の方に教えていた。例えば、「酒匂」みたいな。これは、たま
たま余所の町を通り掛かった時、御濠の蓮がつぼみを付けていて、
「あ、咲こうとしているな」と思ったことから思いついた名で、酒
という字に惹かれていたので考えついた。でも、そろそろ限界にな
ってきた。いつまでも「酒匂」とだけ答えていると、「下の名前は
？」と問われるのだ。「下って？」と答え返したり、その場その場
で話を逸らしたりとしてきたけれど、もう無理が出てきた。だいた
い、あたしの本名は「酒匂」じゃなかった気がするしね。

だから、そろそろ下の名前を考えてみようかと思う。

何がいいだろう。

そういえば、あたしはもう一つ名前を考えなくてはならない。相
棒の名前だ。相棒はいつもあたしの傍に居て、常にあたしに話しか
けてくれる。男なのか、女なのか。そういえば、あたしは考えた事
がなかった。「ぼく」と自称しているけれど、少年とも限らない。
声は心なしか少女っぽい気もする。

そんな相棒の性別は置いといて、実はあたしはこの相棒の姿を見
た事がない。あたし以外の人に至っては、声すらも聞いたことがな
いらしい。でも、声はあたしのすぐ傍に聞こえるので、「なんとなく
足元にいるな。なんとなく後ろをついて来ているな。なんとなく肩
に乗っているな」などと感じることがある。

もしかしたら、相棒は人間ではないのかもしれない。黒猫とかど
うだろうか。喋る黒猫とあたし。魔女っぼくて個人的にはとても美
味しい設定なのだけれども。真相も置いといて、この相棒にも名前
が無い。どうしてかと問うと、あたしが名前を忘れたから、自分も
釣られて忘れてしまったという。他人の所為ってわけね、と思った

けれども、本当の本当に忘れてしまったらしく、あたしが自分の名前を考えていると告げると、相棒が異常なほど喰いついてきた。

仕方無いので相棒のも考えてみようと思う。

どんな名前がいいだろうか。名前にはこだわりたいものだ。名前は自分を支える根っこだということをいつか相棒が言っていた。名前を忘れてしまったあたしと相棒は、その根っこを失ったというところで、自分という意識がはっきりしていないというのだ。なんて、そんなことを相棒が言うものだから、新しい名前にも当然期待がかかる。でも、期待すればするほど、名前が思いつかなくなる。これもいいし、あれもいい、でも、これもいまいちだし、あれもいまいちという具合だ。どういう名前が素晴らしくて、どういう名前が後悔しないのか、考えていくときりがない。

（ぼくはどんな名前でもいいんだけどなあ）

相棒がそんな事を言った。そう言われても、気は重いまま。相棒にも一緒に考えて欲しいと頼んでみたものの、相棒は渋る。

（ぼくには無理だよ）

表情が見えないことが不思議なほど、感情のこもった声だった。

しかし、アドバイスはくれた。

（街を歩いたら、名前が落ちているかもよ）

そういえば、名前を考え始めてから、一步も外に出ていない。いい名前はじっとしていないかも知れない。あたしは納得し、外に行こうとのそのそと起き上がった。

2. 商店街

2.

ところで、あたしの家は、とある町の商店街の裏にある。

といっても、たぶん、商店街の人は誰も知らないだろうし、信じないかも知れない。

あたしの家までの道のりは、通りと通り、店と店、壁と壁、道と道の間の狭い抜け穴に入り込んで、明かりのない道をずっと行った先、やがて、そろそろ戻らないとやばいかも知れないと人々が思うだろう先に、やっと見えてくるのだ。

場所的に言うと、商店街の一番広い時計台のちょうど真後ろになるのだろうか。そこに誰も知らないちよつと広いスペースがあるのだ。時計台は二つの建物が交差している先に建っていて、建物からもその裏という場所は見えないので、誰もそんな場所にスペースがあるなんて思わないらしい。そこにあたしは家を構えている。

もちろん、時計台からは直接来られないので、あたしは毎日抜け道を行き来している。

商店街はとても賑やかで、たくさん音が鳴り響いている。がやがやといつ来ても寂しくはない世界。そして定刻になると、時計台の鐘の音が、物寂しい音色で街の音をもみ消してしまう。あたしはあの音色が大好きだ。家にいるとうるさくて仕方ないけれど、日は当たるけれども常に暗くて、じめじめして、洗濯物も乾かないし、キノコでも生えてきそうなあたしの住まいに、刺激を送ってくれる唯一の存在なのだ。

あたしの知り合いは、あたしの家に来た事がない。呼ぼうとも思わない。というか、あたしの家は本当に、他人の目から見ても、家なのだろうかと思問に思う。どんな家かというと、まず、目に入るのが、廃車の頭とそれを囲んで積み重ねられた勉強机。がちりと

組み合わせっているそれは、いつかきた震度四の地震にも見事耐えきった。大きく組み合わせった勉強机と廃車の頭は、ブロックや鉄筋、パイプ椅子や事務用デスク、大小様々な缶、古毛布やらカーテンやらビニールシートなどで上からすっぽり囲まれており、一つのゲルみたいなのが出来ている。廃車の扉を開けるとそのまま中に入れる。

地面はコンクリートブロックだけれども、拾ってきた毛布を敷いているので、ふかふかで快適。明かりは、カーテンの隙間から取り込んでいる。結構広くて、廃車を抜けると普通に立ち上がる事も出来る。高級な羽毛のクッションや、ソファもあったりして、ちょっと贅沢なほどよく眠れる。ラジオもあるので、外の情報もばっちり入る。勉強机の間と間に作られた鉄パイプの階段を登れば、二階にも入れ、さらにそこから屋上へと抜け出せたりもする。二階はあまり使わないけれど、住まいに近づこうとする者がいたら、そこから一方的に見えるだろうと思う。屋上は、たいてい星を見る時に使う。最近は時計台がライトアップされてしまい、星が前ほどは見えないのだけれど、それでもいい眺めではある。こんな感じで満ち足りた住まいだ。ないものといえば、キッチンとトイレとお風呂、洗濯場所ぐらいだろう。

匂いはどうも気にならないらしい。自分では分からないものだけれど、少なくとも、あたしがそんな場所で生活しているとばれたことは一度もない。生ゴミとかもないので、きっと大丈夫なのだろう……と信じてたい。

ともかく、あたしはこの生活が大好きだ。好きに過ごしているし、好きに生きている。他人にそれを理解されようがされまいがどうってことない。あたしがいいと思ってそうしているのだから、口出しは無用だ。匂いもない以上、迷惑だっとかかかっていないはずだ。現に、時計台の裏にそんなものがあるなんて誰も知らないから、誰も迷惑だと思っていない。ただ、あたしがもっと悲惨な暮らしをしていると思っっている商店街の人もいて、そんな人からは恩恵が下った

りもする。嘘を吐くのはよくないけれど、本当の事を言う必要もないので、あたしはよくお茶を濁すことで解決する。

まあ、確かに、生きるのは大変だ。

その点では、人間も野生動物も変わらない。食べる為に働かないといけないのだから。特に、なまじ街に住む人間は、自活が出来ない。すべてお金とかいう作り物に左右されないと、喰っていけない。喰っていけないと、生きていけない。その上、厄介な事に、こんな生活をしているくせに、あたしの舌がわがままであるという問題まである。ゴミ漁りなんて考えられない。鴉や雀や鳩を食うっていうのもありかなと思ったが、この辺の鳥の肉はお勧めじゃない。鼠なんて論外だ。ここの鼠を食うなんて、死ぬためにやっているようなものだ。となると、あたしはどうか金を稼いで、美味しいものを喰う必要がある。

そのために向かうのが、大通りだ。

商店街の大通りに店を構える者で、あたしを知らない者はいないだろう。片っぱしから手伝える店を探っては、簡単な雑用をちまちまとこなし、おだちゃんや喰い物を手に入れる毎日。それにありつけない日は、時計台の前の広場で、子ども相手に思いついた話をして稼いでいる。手品や占い、笛や歌でちまちまと稼ぐこともある。

普通に働いている人よりも決してお金持ちではないし、むしろ、誰よりも、普通に暮らしている誰よりも、稼ぎは少ないかもしれないけれど、生きてはいける。しないよりはましだ。生きてはいけるのだから。

そして、生きるためのステージが、大通りというわけだ。

あたしはこれを、「外」と呼ぶ。

3. お遣い

3.

（外をふらふら歩いてさ、名前を探そうよ）

そう言う相棒に寄せられて外に出てきたあたしだったのだが、いま、あたしは薬屋にいる。紙きれ握りしめ、薬庫に眠っているという湿布薬を探しに行ったおっちゃんを待って、ぼけっと薬棚を見ている。

（だから言ったじゃん、だから言ったじゃん、通るんなら左に曲がった方がいいって）

相棒がぶつぶつ言っている。

そう、左に曲がれとうるさい相棒を無視して右に曲がった途端、家具屋のおばさんに呼び止められたのだ。どうやら、家具屋のおじいさんが腰を痛め、薬屋が隠し持っている特製湿布薬を取りに行きたいのだが、生憎、手のあいている者がいないらしく、そこへ、上手い具合にあたしが飛び込んだということだ。おばさんがはつきりと、「お礼ははずむ」と口にしたので、あたしは喜んで承諾したわけだが、待たされるわ待たされるわ。

（お礼はなんだろうね）

相棒はさっきから暇らしくて、ずっと独り言をいつている。まあ、あたしが相手していないだけなのだが。

（ちょっと、会話しようじゃないのさ）

ついに相棒がそうごねたところで、あたしはやっと答えた。

「そうだね」

立派な会話のつもりだ。「会話しようじゃない」と言われ、「そうだね」と答える。これで受け答えはばっちりだ。あっちからの言葉というボールを、しっかりと投げ返すことは出来たはずだ。まさか、この立派なコミュニケーションに、文句をつける場所なんてあ

るはずがなからう。

(ばか)

相棒から帰って来た言葉のボールは、とげだらけにカスタマイズされていた。

そんな感じであたし達が短い会話を終えた時に、やっと薬屋のおっちゃんが奥から現れた。持っているのは茶色の小瓶。なんかそう言う歌があったよなあと思ったりもしたが、深くは触れないでおこう。

薬屋のおっちゃんは、蜘蛛の巣と埃だらけでなんだか哀れだった。眼鏡をかけているのだが、その眼鏡も埃だらけで、ちゃんと前が見えているのか心配なほどだったし、髪の毛も、居なくなる前は黒々としていたのに、薬庫から帰って来てみると、短い時の流れが一人の人間に一体何をもたらしただのかと当てもなく問うてみたくなるほど、灰色へと変貌していた。

「ふう、やれやれ。しばらく市販の湿布で済んでいたもんだからね」
薬屋のおっちゃんは独り言のようにそう言って、茶色の小瓶をガラス棚の上にことりと置いた。大きさは、あたしの然程大きくない手のひらにすっぽりと包まれるほど小さい。本当にこれで足りるのだろうか。ちよつと心配になった。

「家具屋のじいちゃんは持病もちでね。その上頑固なもんだから、これじゃないと効かないなんてうるさくてうるさくて」

そう言って、おっちゃんはげらげらと笑い、小瓶のふたをぽかりと開けた。途端に、つんと鼻をつくような薬の匂いがした。いかにも漢方薬という感じの、苦そうな匂い。おっちゃんがその匂いの中へと小さじを入れ、すくうと、赤茶色の粉が出てきた。

「これを水で溶かして、患部に押し込めるように塗るんだ。押し込めるって言うっても、ぐりぐりと力任せにやっちゃいけないよ。あんまり擦ると痒くなっちゃまってよくないからね。程良い強さで塗り込めるんだ」

おっちゃんはそう言うのと赤茶色の粉を瓶に戻し、小瓶をあたしの

手にぎゅっと握らせた。

「大っ切な葉だ。しっかりと頼んだからね」

おっちゃん言葉に、並々ならぬ緊張が走った。

すぐさまあたしは家具屋のおばさんから預かったポーチに葉の小瓶を入れて、おっちゃんに会釈をした。

「ありがとう、おっちゃん。確かに引き受けたから」

そう言って去ろうとしたあたしに、おっちゃんは慌てて呼びかけた。

「おおい、どうせ行くんなら、これ持って帰んな」

おっちゃんの指先は、試食用の飴のかごを示していた。黒砂糖味とはちみつ味の栄養ドロップ。それに、べっ甲飴などがわんさか入ったかごだ。

「かごとあげるよ。こないだトイレ掃除をしてもらったお礼だ」

その節は、確か、ちゃんとお駄賃を貰っていたはずだけど、せっかくなので遠慮なくいただくことにした。

4. 野良犬

4.

さて、薬屋を出ると、そこは十五夜街と言われる通りである。

この街はちよつと特殊らしくて、通りの名前に、番の代わりに夜という文字が入る。一番街なら一夜街。二番街なら二夜街というふうに。どうしてこう呼ぶのか、定説というものがない。子どもの内に聞かされる昔話では、夜を皆で切って分ける兎の神様の話で語られるのだが、実際は大人の事情こそすべてだというやらしい説もあったりする。

ともあれ、この商店街が十六の通りで構成されているのは変わらない事である。時計台を中心に、放射線状に十二の通りがあり、その上に歪な三角を作るかのように、三つの通りが存在する。三つの通りは橋の様にかかっており、それぞれ交差する通りより階段であがつてやつと行ける場所になっている。そして、その外に、十二の通りの外をぐるりと一周する一番大きな通りがあり、そこは十六夜街と呼ばれる。「じゅうろくやがい」ではなく、「いざよいがい」と呼ぶ人の方が多い。十六夜街は、十三から十五の通りほどでは無いが、十二の通りと比べて、少し小高くなっている。というよりも時計台のある場所がちっさな盆地のようになっているという方が正しいかも知れない。

ところで、あたしのいる十五夜街は、夜街の中でも、「ずば抜けてスクランブル」と名高い所で、十六夜街に程近く、九夜街、十夜街、十一夜街、十二夜街、十三夜街あたりまでと交差している場所であり、階段だらけだ。ここで待ち合わせをするなんて、ちよつとした冒険だとまで言われるような面倒極まりないところだ。

無論、あたしなんかは庭なので、迷う事なんて全くない。

それよりも、あたしが憂鬱なのは、この「ずば抜けてスクランブル

ル」とここだけが呼ばれるもう一つの由来のことだ。

（ねえ、まずいよ、鉢合わせだよ）

相棒の気弱な声が聞こえ、あたしははっと前を見る。

すぐさま目に飛び込んだのが、がたいのいい少年だ。いかにも悪童といった顔をしている。この商店街でちよっと名の知れた悪戯っ子だ。そんな可愛い響き、全然似合わないのだけれど。

下町で言えばさすらいの喧嘩猫。海岸で言えば態度のでかい盗賊鳶。サバンナで言えば図体だけでかいガキ大将ライオン。もっと明確に言えば、あまりいい奴ではない。

出来れば、五年くらいは会いたくないような奴なのだが、変に縁があるらしくて、今月に入ってまだ中盤にもさしかかっていないのに、十二回は会ったような気がする。ちなみに、奴もあたしと同じような生活をしているらしい。

「おお、おまえか」

奴が話しかけてきた。

あたしは毅然とした態度で、挨拶を返した。

「ふうん、なんか妙に会うなあ」

奴が偉そうにそう言った。あたしにとっては、それだけでもかちんとくる。目に入るだけでも邪魔くさい。奴が絡んで平穩だった試しなんてないから当然だ。

「んで、何持ってるんだ？」

まずいことに、奴があたしの持つポーチに目を付けた。これには大切な薬瓶が入ってる。とても危険な状況だ。

「別に、大したものじゃないさ」

そう言って、あたしは立ち去ろうとしたけれど、当然、奴が見逃してくれるわけがなかった。

「待てよ、どうせいいモンなんだろ？　ちょっと見せてみるよ」

「なんで見せる必要があんのかよく分かんないな」

自分でも強くでたんじゃないかと思った。

「ほう、少しの間にまた態度でかくなったんじゃねえの？」

「いや、お前に言われたくないしね」

こうなったら自棄だ。上手く撒いて、薬瓶だけでも届けるしかない。

「少し、調子に、乗ってんじゃ」

奴が力んだ。動きがばれられた。全く単細胞。一年括りでも、少しも変化がない。

「ねえぞ！」

予想通りの動き。あたしは予定通り、奴の無駄に太い腕をかいくぐって、通りの向こうへと走りだせた。もちろん、すれ違いざまに奴の足を引っかけられることも忘れなかった。何度同じ手に引っ掛かっていることか。奴の将来が危ぶまれる。

「うがあ」

というまぬけな声をあげて転倒する奴を飛び越して、あたしはとにかく走った。喧嘩上等と安請け合ひして、薬瓶を割ったりでもしたら大変だ。今はまず、このポーチを平穩無事に家具屋まで持っていかなければいけない。家具屋があるのは十三夜街。あたしがいるのが十五夜街の九夜街との階段の傍。十三夜街といえば、同じ十五夜街と交差しているとはいえ、あたしがいる場所とは反対側にある。さて、面倒な事になってきた。

どう進めば撒けるだろうか。

走りながらちらりと振り返ってみると、奴はやつと起きあがったところらしい。無駄にがたいがいいから鈍足……というわけでもなく、さすがあたしと同じ野良生活をしているだけあって、足だけはやたら早い。

「いったん降りちゃったほうが近いかもよ」

相棒のアドバイスが聞こえてきた。

そうだ。確かに、降りちゃった方が近い。十五夜街と十三夜街はどちらも橋になっていて、確かに階段無くして面しているが、家具屋は十三夜街の端っこ。三夜街寄りの場所である。そうすると、十五夜街からはものすごく遠い事になってしまう。でも相棒の言うよ

うに、いったん降りてしまえば、時計台前を横切っていけるため、このまま真っ直ぐ行くよりかはましになる。まあ、ましになるとは言っても、遠い事には変わらない。
これはなかなか骨が折れそうだ。

5. お駄賃

5.

階段を駆け下りながら、これからどう乗り切るかを面倒だけども考えた。面倒だけれど、下手に揉み合って生傷だらけになるよりはずっと楽な事だ。住んでいる所が住んでいる所なので、傷をつくって変な菌でも入ったら、洒落にならない。

なんて思っている間に、時計台前の広場へと出た。九夜街なんて通ったかしらと疑う程の速さだ。我ながらすごいと思う。正面に見えるのが三夜街。そこから階段を上がってすぐの所に、家具屋はある。

（あと少しだね、頑張つて！）

相棒が応援してくれた。体力を少し貸してほしいものだ。

「待てえええええ！ くそ野良猫おおお！」

後ろから罵声が飛んだ。

もう復活したのか。もう少し徹底的にしごけば……いや、何でもない。ともかく、もう少しゆっくりしたらいいのにといいながら、階段を目指す。

そうそう、野良猫というのは、あたしの愛称だ。蔑称という説もあるが、気に入っているので愛称でも間違いないだろう。追っかけてくる奴は、野良犬と呼ばれている。名前負けだ。完全に名前負けだ。野良犬って言うのはもっと賢くて、厳つい輩の事だろう。他にも数人野良犬と呼ばれている者がいるが、奴は其中でも断然不格好で残念だ。

ちなみに、その中で野良犬という呼ばれ方が似合っていないと個人的に思っている人は数人いて、性別問わずどの方も格好いいし、賢い。しかも、皆、通り名まである。

あたしと同じ野良猫仲間でも、頭良くて、格好よくて、通り名ま

である人が数人いる。

世の中って広い。

ああ、あたしも名前が欲しい。

(ああ、可哀想に、ズボンが破けてら)

相棒の声が聞こえ、ちらりと振り返ってみて、思わずにやりとしてしまった。野良犬のズボンはぼろぼろだった。それもこれも、あたしの平穏なお使いの時間と、その合間に名前を考えるとという貴重な予定を奪った罰だ。過激な事を言わしてもらえば、流血してないのが口惜しいぐらい。

階段を駆け上がりながら、いまやつと広場に到達した野良犬をちらりと見下ろす。奴に名前をつけるなら、何がいいだろうか。負け犬とか。

(びったしかも)

相棒の声が聞こえた。

さあ、さっさと荷物を届けよう。登り切った先が家具屋だ。駆け上がってすぐの十三夜街の通りの向こうにある。

登り切ってみると、家具屋の前にはその次女であるお姉さんがいた。お姉さんはあたしの顔を見るなりすぐに笑顔を作ったが、あたしの息切れ具合を見て、何か感じ取ったらしい。

お姉さんが何も言う前に、あたしは急いでポーチを手渡した。

「これ、おじいちゃんの薬ね。水で溶かして、患部に塗って。あんまり強く塗り込まないように気をつけてだって！」

「いつも、ありがとうね。これ、今回のお駄賃だって」

お姉さんも慌ただしく言い、ちらちら階段を気にしながら、あたしに小さな赤い紙の包みを握らせてくれた。こここの家具屋の包装紙の切れ端だ。あたしにお駄賃をくれる時は、いつもこれに包んでくれる。握った瞬間、ちゃりと音がした。重さ的にも、触感的にも、結構入ってやしないだろうか。

「ちよっとちよっと、くれすぎじゃない？」

あたしが思わず率直に言うとお姉さんはくすりと笑んだ。

「こないだ誕生日だったでしょ？ それに、私の手紙を出してもらったし、弟のお守りも頼んじやったからね。ちよっとは足しとかないって母さんが」

「ありがとう！ 後で返してって言われても返さないよ！」

「こら、素直に貰いなさい。あ……」

お姉さんの視線に、あたしは、はっとした。後ろから並々ならぬ殺気が漂ってきた。

「じゃあ、また、何かあったら遠慮なく言ってね！」

もはや商売文句のように染みついた台詞を吐くと、あたしは弾かれるように、十三夜街を階段とは逆の方向へ、つまり、十五夜街と繋がっている方向へと走り出した。走りながら、あたしの耳には、姉さんの、

「気をつけてね」

という声と、

「こるあああ、野良犬！ あの子に手え出したら承知しねえぞっ！」
という非常に威勢のいい声が入り込んできた。後者は本当にお姉さんの台詞か、ちよっと確認させて欲しい。

（うーん、これからどうやって逃げるかだねえ）

相棒が他人事のように言った。

（とりあえず、家に戻ったら？）

「家に帰る道がばれそうだからやめとく」

あたしが最も恐れる事だ。困るところじゃなく、死活問題でもある。あたしみたいな野良生活者にとって、家がばれるという事は、命を握られているようなものでもある。

特に、野良犬のような奴にばれてしまえば、どちらかが使いツパシリになるか、はたまた、色々な方法で町から消えるかまで闘う羽目になるだろう。あたしは野良犬のパシリなんてごめんだし、もつと町での生活を満喫したい。

（じゃあ、どうするつもり？）

相棒に問われ、あたしは今貰った包みを指で転がしながら考えた。

一、二、三、四、包みの向こうにある銭の数を数えてみる。幾ら入っているか、だいたい想像がつく。一旦確認してみた方がいいけれど。

「あたしは女、奴は男。銭さえそろえば、上手い逃げ道があるんだけだね」

あたしの言葉に、相棒が見えない首を傾げた。

（どうということ？）

問いには答えず、あたしは言った。

「まずは、少しでも落ち着ける場所に逃げ込まないとね。貰った銭が何枚あるかちゃんと数えなきゃ！」

思ったままに言って、取り敢えず街を道なりに走った。店と店の間を確認しながら、逃げ道を考える。殆どの裏道は頭に入っているけれども、間違って他人の縄張りに入ってしまったえば、今よりももっと面倒な事になるかもしれない。何処に誰のねぐらがあったか、あたしは必死に思い出しながら走った。でも、こういう時ってなかなか落ち着けない。焦っては駄目だ。焦ったら、もっと考えられなくなる。

6. 鬼ごっこ

6.

（左だよ！ 左は誰のものでもなかったはず！）

再び十五夜街に入り込んだ時、ちょうど、その街の花屋と民家の間に差し掛かった時、相棒がそう叫んだ。この相棒の便利な点は、幾ら叫んでも、あたしにしか声が聞えないところだ。あたしはちらりと左を見やって、ああ、と納得した。相棒が言ったのは、花屋と民家の間では無くて、花屋の反対隣の画廊との間のこと。関係ないがこの画廊、いつも閉まっているのは何故だろう。

（ほら、もたもたしないで！ 野良犬野郎が来ちゃう！）

あたしは慌てて路地へと飛び込んだ。あたしのねぐらへの道ほどではないが、薄暗くて、じめじめしていて、何処となく身体がむずむずするあまり居たくない所だ。そんな所だからこそ、誰もここに住み着かない。あたしはその奥へとずんずん入り込み、野良犬が入り込めそうにない隙間を見付けると、すぐさま入った。確かここは抜け道になっていたと思う。この先を進んで、花屋の裏側の鉄筋などを伝っていくと、花屋の真下に当たる、十二夜街の路地に辿り着く。ただ、一度しか入り込んだことが無いから、少し不安だ。もしも、途中で塞がっていたらどうしようか。奴は確かに入り込めないけれど、あたしも出られなくなってしまふわけだ。

万が一、奴に兵糧攻めとかいう知恵があったらどうしよう。引きずり出されようが、ここで飢え死にしようが、町中に、あたしがあの馬鹿犬にしてやられたという失態が広まってしまふ。不名誉の死だ。

そんな不安と共に、あたしはどうやっても奴が腕を伸ばせない所まで進んでいくと、そっと手に握る包みを開いてみた。僅かに差し込む光と、感触を頼りに、包みの中の小銭を数えていく。でかいの

が十枚もある。さらに、少し小さいのが五枚、穴のあいたのが五枚入っていた。どれも重たい。光を当ててみて、あたしは興奮した。久々に見る形と色の硬貨だった。さすが、あの家具屋だ。物持ちもよくて、性能もいい、素晴らしい家具を作ると、昔から評判が良くて、酒屋並みに栄えていると言われるだけある。それ云々は置いて、ともかく、これだけあれば、あたしの計画通りに事が運びそうだ。

怪しく笑んでいると、相棒が呆れたように呟いた。

（ほらほら、奴に笑い声聞こえちゃうよ。花屋に伝わっても迷惑だから、ちよつと黙ろうか）

冷静な声に、むすつとした。でも、相棒の言う通りなので、あたしは何も言い返せないまま、抜け道をずんずんと進んでいた。野良犬は何処に居るだろうか。まさか、先回りしているとは思えない。この道を使う者が、使えない者に、そう易々と情報を渡すなんて思えない。情報って言うのは、あたし達、野良生活をする者にとって、非常に大事な物だし、死活問題だから、ただであげるなんて出来ない。ただであげちゃうような奴がいたとしたら、そいつは、野良の人じゃない。れっきとした社会の人間だ。

そう、あたし達は、社会を辞めたんだ。

「あ、痛、手が引かかった」

（うげ、破傷風になりませんように）

即座の相棒の返しに、あたしは苦笑した。恐ろしい事を言うもんだ。これも洒落にならないものだ。だって、傷口からやばい細菌が入って、死んだ野良仲間だっているのだから。

「はあ、ともかくさっさと抜けて、目的地に行かなきゃ！」

（で、その目的地って何処なのさ）

「行けば分かる！ 納得する！」

あたしは適当に返事をし、ひりひり痛む手を無視して、ずんずんと進んでいた。

幸い、何処も塞がったりなんてしておらず、あたしは無事、出口

の光を目で確認することが出来た。さすがに眩しかった。

「相棒、奴がいなか見ていてくれい！」

あたしがテンション高めに言った直後、相棒の悲鳴が聞こえた。

（あああああ、やばいよ、あいつ、十五夜街の橋から、こっち見下ろしてるよ！）

「なんだと」

大変だ。どうやら、世の中と彼を見くびり過ぎていたらしい。そうか、ここを使う者の中にも、社会で生きる人はちゃんといたのか。そうなのか。

それよりも、さっさと行かなければ。

（野良犬が動き出した！）

相棒の声が耳に響く。十五夜街から、こちら、十二夜街への階段はすぐ傍。一刻も早く、目的地へ走らなければ。と、焦るあまり、あたしは転んだ。

（何やってんのー！）

「うっせえ！ 奴は？」

（階段へと走ってる途中！）

「鈍足万歳！」

あたしは素早く立ち上がり、そのまま十六夜街に向かって走った。途中、野良犬の降りてくる階段の前を通るのが気掛かりだが、そうも言っていない。彼の鈍足に感謝しつつ、あたしは階段の前を風の様に素早く去っていった。

「くっそおお、バカにしゃがって！」

野良犬の罵声が聞こえた。どうやらあんまりバカにすると、本気で殺されそうになるらしい。これからは慎もう。

7. 湯ぶね

7.

十六夜街に駆け抜け、あたしはすぐに、右回りに走り始めた。此処から先。七夜街に面した場所に、目的地はある。一刻も早く、着かなければ。

（野良犬は後ろ。どんどん引き離していますぜ、オヤビン！）
相棒がテンション高めに言った。

「報告御苦労！ それ、目的地が見えてきたぞ！」

二人揃ってやけくそだ。

でも、もうそろそろ心を落ち着かせることが許されそうだ。

（ははあ、なるほどね）

相棒の納得した声が聞こえてきた。

あたし達の視界に入ってきたのは、七夜街の通りの真正面にある、木造の建物。青い屋根も、煙突も、昔から全然変わっていない、と、三十年野良生活をやっている鼠と呼ばれるじいさんが言っていた。

大きな赤いで、「ゆ」と書かれた看板も、多少補正されてはいるけれども、だいたい変わっていない……ような気がするらしい。

そう、ここは銭湯だ。安くて入り浸れる、潤いのパラダイス。そのなかは昔とは全く違うらしく、信じられないほど、広く、レパトリーに満ち溢れた内容となっている。それが、小銭数枚で楽しめる。まさにあたしホイホイな施設。あたしが何か悪い事をした時は、此処に張り込んだらいいだろうと自分でも思う。

そんな楽園への入口であるのれんをくぐって、あたしは番台のおばちゃんに威勢よく小銭を突きだした。

「おやま。えらく久しぶりだねえ。さすがに痒くなってきたんかい？」

おばちゃんが暢気にそう言って、小銭を受け取った。

「おばちゃん、そんなに久しぶりだっけ、あたし？」

「久々にお顔を見たような気がするよ」

「いやいやいや、だって、一週間前に来たでしょ、あたし」

「十分久々よ、風呂代ぐらい確保しとき」

「じゃあ、少しまけてよ」

「いいお湯を」

一方的に会話を遮断されたところで、あたしは我に返り、すぐさま赤いのれんをくぐっていった。ここまで来れば、もう大丈夫でしょう。後は、ここでゆっくりリフレッシュしてから、奴と再会した時の対処を考えなくては。何か忘れている気がするけれど、思い出せないので後回しにしよう。そう心に決めながら、あたしは着々と服を脱いでいった。

「あら、子猫ちゃん、奇遇じゃない」

ベタなほど姉御チックな声がかかってきた。この声、心辺りがある。振り返ってみて、あたしは少しほっとした。野良犬と呼ばれている姐さんだ。シズミ姐さんといえば、子どもの野良でも知っている、やけに大人のお姐さんチックな野犬だ。シズミなんて名前を持っている辺り、野良者の中でも大物だということが分かる。全く、どっかの誰かとはまるで違う、カッコいい野良犬だ。ちなみに、彼女はあたしの事を、子猫ちゃんと呼ぶ。ちよっと嬉しいけれど、ものすごく恥ずかしい。

「埃だらけね。倉庫の掃除でもしたの？」

「いいえ、ちよっとまぬけな犬といざこざがあってね」

あたしが苦笑しながら答えると、シズミ姐さんは目を細めた。

「またあの子ね。まったく仲がいいんだから」

「えええ！ 何言ってるの、姐さん！」

「若いっていいわね。羨ましいわ」

「冗談きついよ、姐さん！」

「じゃあ、お風呂御先に入るわ」

「ちよっと、聞いているの、姐さあああん！」

がらがらと扉を開けて、姐さんは去っていった。まあ、すぐにまた会えるんだけれど。それにしても、あたしと奴が仲良しなんて、姐さんもとんでもない事を言うもんだ。

（うーん、でも、シズミさんの言うとおりか――）

「ちょ、黙ろうか」

相棒の発言を遮って、あたしは服を脱ぎ棄て、適当に畳んで棚に入れると、お風呂へと直行した。

「さあて、一週間ぶりのお風呂ってわけだ」

（うはあ、ホント、お風呂貯金したほうがいいよ）

「まあ、それはそれで」

がらがらと音を立てて、浴場へと足を踏み入れる。途端に、もくもくと白い煙があたしを取り巻いていった。いつも思うのだけれど、この煙を吸うと、違う世界に迷い込んだような気分になれる。

「さて、まずは体を洗ってすっきりするぞ」

（心もすっきりするといいね）

「空いてるかな？」

見渡してみる限り、あまり客はいなかった。それもそうか。今日は平日の昼間。夏休みとかでもないし、ほぼ野良生活者の貸切りみたいなことになっている。というか、まさか、まったく皆、野良生活者じゃなからうか。まったく、一見さんお断りじゃあるまいし。

「ああ、シズミさんお気に入りの子猫ちゃんのお出ました」

入って早々、そう叫ばれた。いや、叫んではいけないのだけれど、声が響いて叫んでるみたいになっている。びくりとしてしまった。叫んだのは、えっと、誰だっけ。たしか、女狐と呼ばれている人。あんまりいい呼ばれ方じゃない気がするけれど、本人はそれでいいらしい。ちなみに、会ったことないけど、女豹もいるんだとか。女狐さんは年齢不詳で、性格も不詳。でも、間違っても不祥ではない。此間チョコレートくれたしね。

（そうやって、やすやすと釣られるの、改善した方がいいと思う）
「こんにちは、皆さん、ちよっくらお邪魔します」

相棒の声があたしにしか聞えないって本当便利だ。野良生活者は、ある程度礼儀つてものを弁えなきゃならない。それが、極力怪我を作らない穏やかな生活への鍵なのだから。

8. 入浴

8.

「さてと、体を流さなきゃね」

なんてったって一週間ぶりのお風呂。汚れていないなんて言い張るのも愚かだ。すぐに洗い場へ向かうと、ここぞとばかりに洗面器にためたお湯を身体にばしゃりと被せた。あああ、お湯ってなんて気持ちいいんだろう。石鹸もただで使えるし、リンスインシャンプーなんて贅沢な物が置いてある。これは罠だろうか。使ったらなんか起こる罠じゃないのだろうか。本当にパラダイスだ。

(ねえ、ホントさ、一日の間食代を無くして、お風呂貯金しよう?)
相棒がまたそんな事を言った。あんまり言われると、こっちもむきになってしまう。だって、自分のことなのに、他人にとにかく言われて、そのまま言われる通りにするなんて、野良生活者として、なんだか負けたような気がしてしまう。

「考えとく」

あたしは小さくそう呟き、手のひらで泡を作った。それを体中にひつつけると、ぴりぴりと痺れるぐらいの刺激と一緒に、あたしの皮膚に滲んだ。こうやってゴシゴシ洗って、お湯で一気に流すと、本当にさっぱりするんだ。

「こんなに感動するのも、たまーにお風呂入るからなんだよねえ」

(はい、自分を正当化しないー)

相棒が空かさず突っ込んだ。正当化してないなんて言わないけれど、事実を言ったつもりだ。だって、毎日毎日お風呂に入れたら、それこそお風呂のありがたみなんて薄れてしまうだろう。たまに入るからこんなにも感動出来るっていうことはあると思う。

そうやって正当化の為の理屈をある程度完成させてから、あたしはざばんとお湯を被った。もう本当に爽快だ。爽快さが壮快にして

くれる。何とも美味しい仕組み。

（はあ、早く髪洗ったら？）

全く、相棒は面白みってのが分かっていないな。そう急がなくても、リンスインシャンプーは逃げたりしない。軽々と手に取って、ここぞとばかりに沢山押し出して、あたしはゆっくりと冷たさを染み込ませるように、液体を髪に落としていった。

「うはあ、こりやすごい」

（はいはい、怪しいから）

「何で冷静でいられるのさ、相棒、シャンプーだぞ！ リンスインシャンプーだぞ！ 冷たいんだぞ！」

（生憎だけど、ぼくは何も感動しないんでね。それよか早く湯船に浸かりたい）

「行ってくればいいじゃん」

（君が動かないと、ぼくも動けないの！）

相棒が呆れた視線を送ってきたような気がした。もちろん、髪を洗うあたしには見えないのだけれど。というか、髪を洗ってなくても見えないのだった。あたしは相棒に答えずに、もしかすると髪を洗い始めた。さすが、一週間のブランク。全く泡立たない。リンスインシャンプーとはいえ、泡だた無さにも程がある。ほほう、あたしの髪は、こんなにも穢れていたのか。一刻も早く禿ぎをせねば。（うわあ。ホントお風呂貯金して、心からのお願い）

相棒が悲痛な声を上げた。ぽたりと落ちる元氣のないシャンプーの泡は、心成しか黒ずんでいるような気もする。すごい。洗いがいがあるぞ、これは。一回お湯を頭からかぶり、もう一回リンスインシャンプーを見つめあう。

「ふん、さっき抜け道を通ったからだよ。それよかさ、もう一回やった方がいいかな？」

（うん、いいと思う）

相棒の声がばっちり聞こえ、あたしは頷いた。かしやかしやとボトルを押して、もう一度液体を手の上に出すと、今度はちよつと

柔らかめに髪を洗い始めた。もしやもしや、もしやもしやと、少しだけでも、泡立ちがよくなった気がする。黒ずみもさつきほど酷くはない。髪を梳いたり、頭皮を掻いたりしながら、あたしは洗髪に苦闘した。

（今度は散髪代を稼いだら？）

相棒に言われて、あたしは悩んだ。先月溜めた小銭で散髪に行っただけだが、あたしの髪は、もうとっくに肩を超している。いつか商店街の人から、いらないからと貰った赤いリボンで、どうにかまとめている状態だ。そのうち切った方が楽だろう。でも、どうせなら、ハサミの方が欲しい。

もう一度、頭からお湯をかぶると、今度は間違いなくすっきりとした。あたしは浴場まで持ち込んできた赤いリボンを石鹸で念入りに洗うと、それで髪を短く括った。やれることはすべてやった。後は、座ったイスを洗い、洗面台を洗い、そして――。

（わあい、やっと湯船だ）

相棒がやっと活き活きとした声をあげた。まずは、スタンダードな湯船に。少しずつ足をいれ、次第に全身を入れていく。くはあ、この刺激が堪らん。なんて親父みたいなことを思わず言ってしまうほど、最高の湯加減。思いつき足を伸ばしてリラックスしたい。

（ねえ、泡だよ、泡！ ジャグジー！）

相棒が騒ぎだした。落ち着くんだ相棒よ。そう騒がずとも、行くつもりだ。

「あああああ、背中がくわああああ」

あたしが言ったのではなくて、相棒が言った。なるほど、相棒はあたしの背中にいるのか。そう納得しながら、あたしもジャグジーの餌食になる。この気持ちよさはやばい。犯罪級だ。きつと、あの馬鹿な野良犬から逃げるのに必死だったから、体もこころも疲れているんだと思う。とにかく、いま、すごく幸せだ。ぼこぼこ音を立てる泡にぶつかりながら、あたしはぼんやりと浴場内を見渡した。少しでも間違えば、ぼこぼこになっていたか、していたか、どち

らにしても、生傷だらけで銭湯なんて考えたくもなかっただろうと思う。奴ごときにこんな冷や冷やしただけでも名誉が傷ついたのだから、傷なんて一個持つくりたくなかったし、花屋の裏を通った時に作った指の傷以外、つくらなくてよかった。あんなにごちゃごちゃした場所を通ったのに、これだけですんで奇跡的じゃないの。と、思ったけれど、間違いだった。沁みる。確かに沁みる。背中とか怪我しているっばい。ちらちら見てみるけれど、泡のせいでどうしても見えない。まあ、泡が無くても見えないけれど。

「さすが子猫ちゃん。柔らかいのね」

シズミさんがそう言いながら入ってきた。シズミさんは女のあたしでさえ見惚れるほどスタイルがいい。世の男たちが放っておくわけがないけれど、シズミさんに手を出す奴は、志半ばで人生に終わりを告げる事になってしまっただって聞いたことがある。うん、手を出す方が悪い。だって、シズミさん相手だもの。

「何してるの？ 蚤でもいた？」

「ううん、ちょっと怪我してるのかなって……」

あたしが答えると、シズミさんは隣に来て、あたしの背中をすつと触った。それがいきなりだったせいかな、シズミさんがわざと力を込めたせいなのか分からないけれど、電撃が走ったかのような痛みを感じて、あたしは思わず、「あいったああ！」と浴場中に響き渡る悲鳴を上げてしまった。何処からともなくくすぐすと笑みが聞こえてきた。

「シズミさん、いちやいちやするんなら、上がってからにしてくださいよ！」

女狐さんだ。すいません。でも、あがってからもしませんから、とあたしはシズミさんを振り返った。シズミさんは苦笑しつつ、軽く女狐さんに返事をし、あたしに言った。

「うん、確かに一本綺麗な筋が入ってるね。針金かなんかでびつとやっちまったんでしょ。まあ、深くもないし、気にする事はないわね」

「そうですか……ありがとうございます……いてて」
あたしはお礼を言いつつ、ジャグジーに背中を当てた。

9. 命名

9.

そろそろ高温風呂に浸かろうかな。確か、効能に切り傷とか書いてあった気がする。あたしは立ち上がり、広い浴場をもう一度見渡した。今ここで大地震とか起こって、あの壁が崩れたら男湯と繋がっちゃうんだとか変な事を考えながら、シズミさんの横を通って高温風呂へと向かった。

「子猫ちゃん、前見ないと転ぶよ」

シズミさんの注意が無かったら、多分あたしは湯船の階段につまづいていたと思う。ちよつと、相棒、注意してよ。

（ごめん、僕も同じこと考えてよを見てた）

すぐにそんな恋人チックな言い訳が聞こえてきた。くそお、選りよってそんな言い訳の仕方あるかよ、くそお。まあそれはいいとして、シズミさんの注意通り前と足元を見て歩いたので、無事に高温風呂へと辿り着いた。

「えい」

と思い切って入ったので、ものすごく沁みた。背中、足、指、肩。あれ、一杯沁みてるみたい。気付かない間に傷って作っているものなのね。困ったものだ。

（ねえねえ、覚えてる？）

相棒が声をかけてきた。これまた彼女みたいな言い方だ。狙っているんだろうか。まあ、意地悪をする理由もないので、あたしは小さく「何を？」と問い返した。

（君と僕が外に出た理由さ）

「理由？」

何だっけ、と、あたしはぶくぶくと沈みかけながら、思い出していく。

まず、いまこの銭湯でのんびりしている理由は、奴だ。馬鹿犬のあいつから身を隠さなければいけないというプライドの傷つく理由からだ。んで、どうして馬鹿犬から身を隠さなければならなくなっただっけ。その理由は……たしか、あいつの足を引っかけたからだ。その後に、家具屋の姉さんに出会って、そういえば、あの罵倒は本当に姉さんの声だったのだろうか。まあ、深くは考えないでこう。で、どうしてあいつの足を引っかけたんだっけ？

（はあ、切りが無いね。理由はさ——）

「ああ、待て待て。こういうの、自分で思い出せた方がすっきりするから」

（はいはい）

あいつの足をひっかけて転ばしたのは、あいつが絡んできたからだ。持っているポーチに目を付けて……そうそう、それは、家具屋さんに届けなきやいけない薬だったっけ。そうだ、薬屋さんにお使い頼まれたところだったんだ。それで、薬屋さんにお使い頼まれた理由が……町を歩いていて薬屋さんのおばさんに会ったから！

（思い出せそう？）

「ちょ、黙ってて」

町をてくてく歩いていたのが……—。

（言わなくていいの？）

相棒の声なんて無視だ。どうしてだっけ。天気がいいから散歩でもするか。違うな。確か、その邪魔をするから罰が当たったんだって馬鹿犬のズボン破けた時に言った気がする。えっと、ええと、ええと……。

（な——）

「名前か！」

思わず大声で言ってしまった。辛うじて、相棒が言う前に思い出せた。というか、こいつ、言おうとしたな。

「そっか、名前を考えるんだった」

ちらほらと視線を感じつつ、あたしは気付かないふりをしながら

眩いた。

(そうそう。ぼくの方まで考えてくれるんでしょ?)

「そうだったそうだった」

あたしは顔き、ふと壁側の高い位置にある窓を見つめる。あんなに高い位置にあるのに、ぼっちり西日が当たって眩しい。そうか、もう夕方なんだ。早いなあ。

(どんな素敵な名前があるか、ちょっと思いつくままにあげてみようよ)

眩しいなあ。だけど、きらきら光っていて。綺麗。黄昏って綺麗でなんだか寂しいんだよね。曙とは対照的だけど、でも、同じくらい好き。光がきらきらしていて、とても眩しいけれど、本当に好きだな。登って行く太陽。沈んでいく太陽。どっちも。

(こう考えてみるとさ、素敵な響きの名前っていっぱいあるよね。

どれか一つってなると、すごく悩んじゃうな。ぼく、やっぱり考えられないや。考えついた?)

「アカリ」

(ん?)

あたしは西日を見つめたまま、眩いた。そうだ、これでいいじゃない。

「アカリでいいや」

(どうして?)

「西日が眩しいから」

(えええ!)

相棒が呆れたように声を上げた。いいじゃない。名前なんてね、外側だけなの。所詮、呼ぶ時に困るから付けるようなものなの。いいじゃない、アカリ。可愛いじゃない。

(じゃ、じゃあ、ぼくは?)

「そうだね」

あたしは少し考えながら、窓の向こうの赤く染まっていく空を見つめた。このあと、空は月を目立たせるための闇に包まれていくん

だ。夜の闇も好きだな。あの静かな感じがとてもいい。静かで少し涼しいあの雰囲気がつっても好きだ。そうそう、あの静かな雰囲気がね。だから、相棒の名前は――。

「クラガリ」

（クラガリ？）

「あんたにぴったりだよ」

（クラガリ？）

「うん」

相棒は何度も、

（クラガリ？）

と訊いてきたけれど、あたしは適当に頷いたつきり、後はもう次は何のお風呂に入るかしか考えない事にした。だいたい、相棒の名前って、あたしが呼ぶために付けるものだから、あたしが「クラガリ」ってつけちゃったらそれまでなんだよね。

「はあ、すごくいい天気だったねえ」

未だに、

（クラガリ？）

と訊ねる相棒^{クラガリ}に、あたしはそう返した。

「明日もこんな天気だといいねえ、クラガリ」

クラガリは何やらごちゃごちゃ言いだしたけれど、もうクラガリはクラガリ以外の何者でもない。思いつきとはいえ、こんなにピツタリだとは思わなかった。クラガリは、クラガリって名づけられるために生まれてきたんだ、きっと。

「さあて、サウナにでも行こうか、クラガリ」

沁みる身体を動かして、あたしは滑らない程度に勢いよく高温風呂から上がった。そんなあたしの足元に、確かに付いてくる気配。

（うん、わかったよ、アカリ）

クラガリが、どこかぶすつとした感じに答えた。

10. 夕暮れ

10.

あたしにアカリ、相棒にクラガリという名前がついたその日、結局あたし達は恐ろしい事に、銭湯の魔力にまんまとひっかかってしまつて、四時間も長湯してしまつた。なんだかくらくらする。

「入り過ぎでしょ。ほら、ジュースでも飲みなさい」

そう言つてあたしにスポーツドリンクを恵んでくれるのは、シズミさんだ。あれ、何でシズミさんがまだいるんだろう。入り過ぎでしよつて、シズミさん、あたしと同じ時間に入つたじゃない。姐さんに言われたくありません。と、思いつつ、ジュース貰つてう言うのもなんなので、あたしはただ、

「ありがとう」

とだけ言つて、ジュースを飲んだ。そうそう、あたしに名前が付いたという生まれたてほやほやのニュースを、シズミさんにも伝えるべきだろうか。いつまでも「子猫ちゃん」じゃ、新しい「子猫ちゃん」が生まれた時に困つてしまふかもしれない。

「ねえ、シズミさん」

あたしは思い切つて、シズミさんに声をかけた。

「ん？ どうしたの？」

問い返してくる顔。それを見ると、急に自信が無くなった。

あたしみたいな小童が名前なんて持つて生意気じゃないだろうか。

野良猫は野良猫が名前でもいいのではないだろうか。あ、でも、さつきの女狐さんだつて確かちゃんと名前があつたし、あの馬鹿な野良犬にも通り名こそはないけれども、本来は忘れられがちな名前があつたはずだ。うん、大丈夫。あたしだつて自分だけの名前を持つ権利はあるものよ。だいたい、前にシズミさん自身に本名を訊かれたことがあつたじゃない。だから、自信を持って、あたし！

「名前ってやっぱりあった方が便利なの？」

違うよ。あたし、言いたいことが違うよ。かなり下手に出てしまった。それもこれもシズミさんのただならぬカリスマ性が影響しているんじゃないかと思う。まずは名前が必要かどうかの是非を正確認してから、改めて、名乗るかどうかを決めるっていうわけだ。うん、なかなか卑屈だぞ、あたし。

（ずいぶん飼いならされた、腰の低い猫だね）

相棒が、違った、クラガリがそう言った。新しくつけた名前のせいで、生意気さに磨きがかかったんじゃないだろうか。姿が見えて触れるんだったら、なかなか殴りたいお言葉だ。

シズミさんはというと、少し考えてみて、軽く頷いて答えた。

「うん、そうだね、野良生活者って意外といっぱいいるから、それぞれ区別するためにも名前があったほうがこっちとしてはすごく便利利かもね」

「あたしも名前があった方が――」

「すぐく助かるかもね」

シズミさんはそう答えて笑んだ。よかった、いらなんなんて言われなくて。通り名がある人から見て、通り名すらない野良者がどう映っているのか分からないけれど、少なくともシズミさんはあたしが名前を持つ事に肯定的だ。これだけで、自信が持てた。

「なにか候補でもあるの？」

シズミさんは察しているのだろうか、あたしに何気なさを装ってそう訊ねてきた。実際、あるの？ というよりも、あるんでしょ？ と断定的なものを含んだ訊き方だったから、きっとあたしの態度が見え見えなんだろう。うん、まだまだ未熟だな、あたしも。だから、あたしは観念して頷いて、言った。

「あります。さっき思いついたの」

「それはそれは出来立てのほやほやってわけね。それで、何て名前？」

「……アカリ」

あたしがもしもじしながら言うと、シズミさんは笑みを深めた。
「ふうん、可愛い名前じゃない。アカリちゃんね。でも、どうして、そんな名前に？」

あたしは頬が赤くなるのを感じつつ、女湯ののれんを見つめながら答えた。なんか、すごく熱い。恥ずかしくて、熱い。

「西日が……眩しかったから……」

そう答えると、シズミさんは目を丸くした。ほら、今に笑われる。
(覚悟しなよ)

クラガリに言われた。こいつ、クラガリって命名してから一層嫌な奴になった気がするの。は気のせいだろうか。

けれど、あたしやクラガリの期待を裏切って、シズミさんは何かを懐かしむように、微かに目を細めると、窓を見やった。もうとっくに日は沈んでいて、辺りは真っ暗だった。その奥にある何かを見つめながら、シズミさんは呟いた。

「同じね」

何が同じなのだろう。訊くまでもなく、シズミさんは続けた。

「私と同じ。私が名前を付けた時と同じよ」

それはとても光栄な、《同じ》だった。だが、どう同じなのだろう。シズミさんとあたしの名前のアカリに、どんな共通点があるだろうか。そんな疑問を見透かしてか、シズミさんはあたしを振り返った。

「私もね、日入りを眺めながら名前を考えたのよ」

ぽつりと溢すと、シズミさんは立ち上がり、仄かな笑みを浮かべた。

「それじゃあ、私はそろそろ帰るわ。生きてたらまた会いましょう」
その言葉に黙って頷く。生きていたらまた。これが野良生活をする者にとって、ポピュラーな別れ際の挨拶。家や定職のある者には分からないかも知れない。でも、毎朝、毎晩、今日も生きて太陽や月を拝めることを喜ぶ世界なのだ。何度も口にする言葉だけれど、それでもやっぱり重みを持つ瞬間が多々あるものだ。

シズミさんの去っていった方向をずっと眺めていると、番台のおばちゃんに声を掛けられた。

「ちよつと、野良ネコちゃん」

「お婆ちゃん、あたし、もうちゃんとアカリって名前があるんだよ」
あたしが胸を張って言うと、お婆ちゃんは、おや、と眉を上げた。
「そりゃ、奇遇だね。わたしの母方の伯父の義理の兄の次女と同じ名前だよ」

「で？ なんなの？」

ちよつと腹が立ったので、つつけんどんに訊ねてしまった。幸い、番台のお婆ちゃんは氣にならなかったらしく、そうそう、と話を戻した。

「野良ネ……じゃなくて、アカリちゃんね、アカリちゃん、小遣い稼ぎしないかい？」

飛び付くべき話だ。

「するする！ やります！」

自分で思っていた以上にがつついてしまった。

銭湯でお手伝いをするのは初めてではない。今まで何度も何度もある。大体何をするのかは分かり切っているけれども、一応訊いてみた。

「何をしたらいいの？」

「清掃」

予想通りだった。

ただ、今日の事ではないらしく、あたしはまた明日、この銭湯に来る事になった。

さて、問題は帰りだ。

来るべき時間を教えて貰った後、あたしは憂うつな気持ちで銭湯を後にした。

あの野良犬はしつこい。何処か遠い山の野犬が、一頭の鹿を捕まえる為に、何日間もネチネチと追いまわすという話を聞いたことがあるのだが、まさに彼はそんな奴だ。馬鹿の癖に本当に面倒臭い奴

だ。同じ野良犬なのに、どうしてシズミさんとああ迄違うのだろうか。分からない。

あたしの頭上では、月の明かりが真っ黒な空を照らしていた。でも、それ以上に、街は明るいので、街の人たちからは、月明かりなんて忘れられかけている。もちろん、あたしは忘れない。あんなに綺麗な存在、忘れられるわけがない。

そんなわけで、あの馬鹿犬は気になるけれども、月でも見ながら堂々と帰ることにした。

奴は暗がりから狙ってくるような卑怯な男じゃない。馬鹿でいつまでもネチネチしているけれど、これだけは言える。来る時は、正々堂々と正面から向かってくる男前な奴だ。だから、来る時ははっきりと教えてくれる。会ってしまったら逃げればいいだけ。あたしはそう身構えて、家路につく。

（住処がばれないといいね）

クラガリの台詞がぐさりときた。

幸い、そうはならなかった。とても有難い。まあ、つけられていたとしても、住処に向かう最中、奴の体格だと何処かしらでつかえてしまう。だけれども、何処から通じているかを知らなかったことは大きい。この幸運には感謝しなければ済まないだろう。

「さて、明日も早いし寝なきゃだね」

（名前も見つかったしね）

クラガリが囁くように言った。あたしは破れかけているソファの上から空を眺めた。机や椅子の足の向こうに広がる空は、真っ暗で、地上からの反射やらで、月の光しか見えない。よく見たら星が見えるという程度だ。それでも、目に見える星はとても綺麗だった。

ともかく、そんな明かりを見つめながら、あたしはすんなりと眠りに就いたのだった。

1. お仕事

1.

朝ってなんでこういつもチュンチュンチュン五月蠅いんだろう。

そんな事を言っていたら、相棒によく（冷たい人）だとか、（小鳥の可愛さが分からないなんてさすが野良猫だ）なんて言われたりしていたっけ。何よ、アナタなんて黒猫じゃない、小鳥を容赦なく食べる黒猫のくせについて言い返したものだっただけなあ。

ああ、そもそも、あたしが言いたいのはこう言う事じゃないんだ。それに、相棒じゃなくて、クラガリじゃない。あたしはアカリ、相棒はクラガリって決めたばかりじゃない。名前って大切よ。忘れてしまったら名前としての意味を失ってしまうし、名は体を表すっていうじゃない。名前すらも忘れたとなれば、体がなくなっちゃうってことなのかしら。そもそも、あたしには、昔、ちゃんとした名前があったわけだけど、今のあたしはその時のあたしと何か変わったのかしら？

（ええい、早く起きろ！！）

クラガリにそう叫ばれて、やっと意識がはつきりとした。どうやらあたし、寝ぼけていたみたい。

（今日は銭湯で仕事でしょ！ 遅れたらお駄賃貰えなくなっちゃうよ！）

そうだ。今日はこの街のパラダイス——銭湯でお手伝いという名のお仕事だった。うまくいけば昼飯も貰えるかもしれないし、アイスやジュースもなんだかんだでいただけるかもしれないという図々しさとともに、少ない生活費の為に頑張る日だった！

あの銭湯、妙に待遇がいいから、たまに不気味なんだけど、そんな事を言っている暇があったら、お駄賃稼ぎのために動けっという

のがあたしのモットーだ。それにしても、本当に不気味だ。仕事と
いっても、浴場のタイル床磨きだとか、脱衣所のモップ掛けだとか
しかないのに、どうしてあんなに貰えるんだろう？

まあ、今は深いことを気にしないようにしよう。今日は今日のこ
とだけを考えて生きる。それが正しい野良生活者としての在り方で
あろう！

（って、アカリが勝手に定義づけてどうするの）

クラガリがなんか言ってるけど、聞こえないふりだ。

「さあ、今日も張り切って街に出ようか！」

なんせ、銭湯のお手伝いがさっさと終わったら、また別の仕事が
舞い込んでくるかもしれない。別の仕事が舞い込むってことは、イ
コール、生活費が増えるってことだから、出来るだけ街はうろつい
ておくのもすごくいいことだと思うんだ。うまくいけば、声を掛け
られて、「銭湯でのお手伝いが終わったら、家に来いよなー」みた
いな事になるんじゃないかって都合のいいことが頭に浮かぶ。

なんせこの街では、お店の雑用は、野良生活をする者の仕事にな
りやすい。

それだけ野良生活者が信用されているっていう事でもあるんだけ
ど、街の人達は、野良生活者も街にお金を巡らせる一部だって考え
ていて、野良生活者に賃金を渡すことを厭わない。もちろん、この
街にずっといるあたしは、野良生活者に賃金を渡すのを厭うってい
う感覚がよく分からないのだけど、とにかく、この街はそれで成り
立っている。

うまく稼げたら、古本だとか、漫画だとかの贅沢品が買えるかも
しれない。

（随分張り切ってるけど、銭湯のお手伝い以外の仕事が舞い込んだ
ら、って話でしょうが）

「まあまあ、夢を持つのはいいことじゃない」

クラガリの現実的思考には困ったものだ。

あたしはその後も、クラガリにいちいち小言を言われながら朝支

度をせっせと行くと、必要最低限のものを持って、いそいそと街への通用口に入りこんだ。この通用口から入り組んだ狭い通路を経て、街へと出ていく時、あたしはいつも何処かわくわくしている。

何がそうさせているのか分からないけど、暗くて迷宮のような道から、明るくて眩しい街の中へと飛び出す瞬間、何か新しい世界が広がっているかのような予感がする。もちろん、そこに広がっているのは、昨日見たのと同じ景色なんだけど、それでも、この感覚を味わうと、「よし、今日もがんばるぞ！」っていう気分になれる。

さて、今日は予定通り、銭湯へまず行くのだけど、時間がまだあるし、ぐるりと遠回りしていこう。街の人へのアピールの為だ。野良猫のアカリは今日も生きていますよ。もしくは、今日も健在です。野良生活を営む者にとって、このアピールはとても大事だ。野良生活者同士でさえ、お互いの住処を教え合うのを良しとしないような種族だから、いつどこでどうなっているのかが分からない。

二週間はともかく、一カ月、二カ月と顔を見せないでいると、あいつはもう何処かで死んでしまったのさ、となってしまう、いつの日か顔も忘れ去られてしまう。街の人っていうのは、驚くほど忘れるのが早い。だから、一度忘れられてしまえば、思い出してもらうのなんて一苦労だし、思い出してもらったとしても、違う野良が仕事を持っていたりして、すごく困る事になる。

あたしもシズミさんみたく名前を売って、武術の腕も磨いて、危ないけれど安定した稼ぎが手に入る仕事が出来ればなってたまに思う。よく広場に居る野良者のネズミ爺さんは、そんなあたしに、「若いからそんな夢見るんだ。本当は今のあんたの暮らしが理想なんだ」って言っていたけれど、あたしにはそれがどうしても信じられない。そういうネズミ爺さんだって、昔はシズミさんみたく危険な目にあっていたけれど高給取りだったって聞いているし、余裕のある人の戯言だとは思えない。

あたしだって、もっとシズミさんみたいだったら……。

（おおい、何ぼやっとしてんの。もう銭湯だよ！）

クラガリに言われて、あたしは銭湯を通り過ぎそうになっている事に気付いた。なんだ、今日は全然声かけて貰えなかったじゃない。

2. くされ縁

2.

銭湯についた途端、あたしはこの仕事が今すぐキャンセル出来たらしいのに、と空かさず思った。

きつと、あたしと目があった者も、同じことを考えただろうな、と思う。それにしても、手伝いが他に居るなんて聞いていないぞ。あ、あっちもそんな表情をしている。おそろいなんて嫌だなあ。

(これも縁だね)

クラガリが嫌なことを言った。

入ってすぐに目があったのは、あの、野良犬の小僧だったわけだ。あからさまに嫌な顔をしてこっちを見ている。なんだよ、嫌な顔したいのはあたしの方だったの。小僧のくせに生意気だぞ。

(小僧って、アカリと歳変わんないしね)

今日のクラガリはいつにも増して五月蠅い。

「なんだよ、いつまで見てんだよ」

不意に、あっちが先に口を開いた。

「別に。手伝い他に居たんだなあって思っただけ」

「こっちの台詞だ。ちっ、稼ぎが減っちゃうじゃねえか」

それこそあたしの台詞だ！ って言いたかったけど、これ以上何か言っても何の得にもならないし、黙っていよう。こないだの事があったと言っても、まさか仕事で暴力的に出てくるなんて思えないしね。それにしても、ここのおばちゃんも人が悪いなあ。あたしとこのバカ犬が仲悪いってよく知っているくせに。

「あらあら、もう二人とも来たのね」

噂をすれば影。いつの間にかおばちゃんがいた。いつの間に？

ちなみにあたしとバカ犬(もうバカ犬でいいよね?)が居る所は玄関に当たる場所。人が現れるとしたら、男湯か女湯の脱衣所からな

んだけど……脱衣所は男女とも開いた様子もない。開いたらガラガラって音がするはずなんだけどな。あれ？

まあいい。とにかく、おばちゃんが現れたからには、今日の仕事の始まりだ。

ちゃっちゃとやってさっさと退散してこのバカ犬のいる空間からおさらばしてやるぜ！

「じゃあ、男湯と女湯、それぞれをお願いするからねえ。どっちを掃除したい？ お客さんいないから好きな方掃除していいよ？ 公平にじゃんけんで決めなさいねえ」

おばちゃんが言った瞬間、あたしの中に知的好奇心が芽生えた。だって、男湯と女湯の位置なんて、少なくともこの銭湯においては不変的なもの。天地がひっくり返っても、ここの経営者の気が変わらない内は、逆になる事なんてきつとない。いや、絶対ない。つまり、他人から見ても、自分から見ても、女という性別に分類されるあたしは、男湯ののれんと扉の向こうという未知の領域へ入りこむことなど不可能！ 今までここのお手伝いをする時だって、ここの清掃をいつもやっていて、いつの間にか男湯を掃除し終えている野良兎さんと一緒に事が多いから、男湯なんて見たこともない。これから先も、野良兎さんがいない時にお手伝いする機会なんて、いつ来るか分からないのだ！

「あたし——」

「俺——」

おばちゃんに、あたしの中で芽生えた好奇心をアピールしようとした途端、バカ犬まで手を挙げた。こやつ。何を考えておるのだろう。まさか、こんな時に限って、普通に男湯をやりたいなんてバカなことをいうんじゃないだろうねえ？ こいつならいいかねない。

「なんだよ、俺が先だぞ」

予想通りの言葉だったので、あたしは無視しておばちゃんにだけ言った。

「あたし、男湯やりたい！」

「俺、たまには違う方見てみたい！」

おっと、バカ犬なんて言ってられなないかな？ あたしが「男湯やりたい！」ってバカ正直に申し立てたのに、あいつは「たまには違う方見てみたい！」だと……？ なんか悔しい。なんか負けた気がする。まあ、どうでもいいけど。

（どっちにしても、下心あるっぽく聞こえるね）

クラガリらしい言葉が聞こえた。これ、あたしにしか聞こえないなんてフェアじゃないよね。今のだけは、うまく言い回した気になって胸を張ってる親愛なる野良犬君に聞かせてやりたかったよ。っていうか、そういうクラガリだって、本当は違う方も見てみたいんじゃないの？

（ぼくはその気になればふらっと男湯覗いたりできるからね）

得意げに答えてきたんだけど、あれ、これってなんかおかしくない？ クラガリって男だっけ？ 女だっけ？ 性別とか考える方がおかしいの？ 女湯だけでなく、男湯も覗けちゃうクラガリの性別とか考える方がおかしいのかな？ そもそも、「その気」って何？ ここにこそ下心が垣間見えるのは気のせいなのかしら？ っていうか、あたしなんてこの裸体を幾度となく見られているどころか、っていうわけで……。

いかんいかん！ 今はクラガリの問題発言なんて気にしている場合じゃない！

「あらま、やっぱり気が合うんだねえ。それじゃあ、それぞれお願いね。やり方はもう分かっているでしょう？ おばちゃんは玄関と番台をやるから、それぞれの脱衣所と浴場をよろしくね。トイレはもう掃除してあるからやらなくていいからね」

というわけで、あっさりとあたしの希望は通ったというわけだ。

うん、今はクラガリの性別なんて気にしないぞー。
あたしはお化け屋敷に入るようなわくわく感で青いのれんを潜って、扉を開いた。電気は付きっぱなし。女湯の方で野良犬がせつせと掃除している音が聞こえてくる。それにしても、野良犬もあとも

うちよつと歳を食ってたら女湯なんて掃除させて貰えなかっただろうな。ちっ、惜しいな。

（でもそれじゃあ、アカリも男湯の掃除出来ないじゃん）

クラガリ、ちよつと黙ってて、掃除に集中できない。

そんなわけで、やつとあたしは男湯の脱衣所という禁断の地に立ちすくんでいる。っていうか、野良犬はあっさりと掃除し始めたのか。クール気取りめ。……とはいっても、あたしだっていつまでもぼうつと見ているわけにはいかないし、脱衣所はあんまり女湯と変わらないし、さっさと掃除しちやおう。

そう決めるとすぐに、あたしは作業に取り掛かった。

3. 雑談

3.

掃除については特に書くことはない。だって、この銭湯、女湯とあまり変わらないだもの。ちよつとは違うのかなって思ったけど、左右対称になっていただけで、特に違いつていう違いはなかったみたい。面白いことも特になくて、掃除中、クラガリがちょっかい出してくるぐらいっていう程度。

だから、さっさと掃除を終わらせると、さっさとおばちゃんの前まで報告に行った。悔しい事に、野良犬の方が早かったらしい。本当に悔しい。まあ、取りかかったのがあっちの方が早いからハンデみたいなものがあつたわけで冷静に考えれば当たり前なんだが、本当に悔しい。しかも、あっちはこっちのこと見えていないかのようにアイス食ってる所が腹立たしい。街中ではちよくちよくかい出してくる野良犬とは別人みたいだ。まあ、それもそうなのだけども。

この野良犬、番台のおばちゃんには頭が上がらないのだ。かく言うあたしも他人の事言えない。というのも、番台のおばちゃんはよくあたし達のような野良生活者を庇ってくれるのだ。野良生活は気楽ではあるけど、嫌なことも多い。住処を知られるのがタブーなのも、この嫌なことを避けるためだ。

というのも、ここの街の人達は、野良生活者を当たり前に受け入れてくれるけれど、街の外では必ずしもそうではないからだ。特に、街の外で育った不良などは性質が悪い。わざわざ時間を割いてここまで出向いて、わざわざ野良生活者が現れるのを待って、わざわざ因縁などを付けて暴行を正当化するという事もないわけではない。昼間なら街の人達の監視もあるし、そういう輩は現れにくいんだけど、問題は夜だ。夜は強い野良生活者しかふらつけない。もしあた

しや野良犬なんかのような子どもがふらつけば、次の日は息をしていないだろうと思う。それだけ危険も多いのだ。

だから、あたし達子どもの野良生活者は、街に住む大人たちに頭が上がらないのだ。生活を守ってもらっているという実感が付きまといっているのだから、当り前。街の人達はいくら生意気な子どもでも、守ってくれるけれど、子どもだってそれを汲み取って愛情を返すことも出来るし、その愛情が大人たちを喜ばすってことも分かっている。

だから、今ここで溶けそうなアイスをあほみたいな表情で食べているこの野良犬だって、おばちゃんの前ではいい子ぶるのだ。っていうか、どうしてアイス食べているんだろう。よく見たらそのアイス、この銭湯で売ってるアイスの中でも高い部類のものじゃないか。許せん。なぜお前はそれを食べているのだ。

(買ったんじゃない?)

クラガリがそう言っても、あたしのこの怒りはそう簡単に治まらない。

「ああ、アカリちゃん、掃除終わったんだったら、好きなアイス一つ持って行きなさいな」

「いただきます!」

怒り? 何のことだっけ。とにかく、アイスだ。銭湯の後はアイスって決まっているのだ。入ってはいないけど、お湯で洗ったから暑い。だから、アイスは本当に有難い。救世主だ。もう、アイスって呼び捨てにしちゃ失礼なのではないだろうか。これからはアイス様と呼ぼう。

あたしはミルクアイスという一番高いアイス様を取り出して、さっそく袋をあけた。暑いときはソーダアイスとかかき氷みたいなさっぱりしたものが定番みたいだけど、本当に暑くて疲れている時ほどこのミルクアイスは美味しく思える。まあ、人によるんだろうけど、少なくともあたしの体力を守護してくれるのは、このミルクアイス様だ。この真っ白ですべすべとしたお肌。にもかかわら

ず、濃厚そうな甘い香り。そして、太いのは何処かスマートに見える神々しい姿。

（いいから、早く食べなよ。溶けちゃうでしょうが）

クラガリってどうしてこんなに冷めているんだろう。でも、たしかにクラガリの言う通りではあるのがものすごく悔しい。クラガリはいつつあたしよりも頭一つしっかりしているんだ。どうしてだろう。

そんな事を考えながら、あたしはミルクィアイス様を思い切ってぱくりと口に入れてしまった。

「お前の通り名、猫じゃなくてワニだな、ワニ」

こう言ったのは、クラガリ……じゃなくて、少し離れたところでアイス様を喰っている野良犬だ。相変わらずあほみたいな表情でこっちを見ている。しかし、何だろう、クラガリがたまにこんな表情をしている気がするんだよね。雰囲気と言う奴だろうか。本当にこの二人、似ている気がする。

あたしはミルクィアイス様をいったん嚙んだ後、ゆっくり呑みこんでから、言った。

「ワニでもいいし。ワニ好きだから」

別に好きじゃなかったんだけど、これには野良犬もからかいがないとつまらなさそうな顔をして、長い溜め息をついた。

「なあ、ところでさ」

いつもの突っかかるような感じではなかったので、少し気になった。

「もうすぐ街の外にテントが張られるの、しってるか？」

「テント？」

初耳だった。いや、忘れていただけなのだろうか。ともかく、野良犬がこういう話題を振ってくるのはあまりないことなので、聞くに越したことはない。

「なにそれ、知らない」

「やれやれ、これだから不真面目な猫は困るね。集会とかしないの

か？」

「うるさいなあ。一言多いんだよ。あたしゃ、クロクマとは違うの」
クロクマというのは、あたしや野良犬と同じくらいの年頃の野良生活者だ。元の通り名はあたしと同じ野良猫であり、そのなかでも黒くて大きな猫と称されるような少年だ。確かに、がたいはよく、あたしも野良犬も彼の隣に並ぶと明らかにガキ大将と子分という感じになってしまふ。クロクマっていうのは、野良猫仲間のうちでもボス猫と称される野良生活者の主的位置の爺さんがつけたもので、あたしのように自分で考えた名前ではないらしい。

で、そのクロクマっていうのが、これまた真面目臭い者で、野良猫と呼ばれる者だけが集える夜の会合の席でも、出席者の中で彼が一番話の内容を覚えているものだ。かくいうあたしは一番話を覚えていない奴なんだけどね。

「まあいいけど。まあ、それでな、テントってのが、サーカスか何かをやるらしくてさ」

「ふうん、サーカスカあ」

「サーカスってしってんのかあ？」

サーカスくらいは知っている。前に学校へ通っていた頃、そんな場所が本で出てきた。ピエロの絵がものすごく怖くて泣いたのを先生が慰めてくれたっけ。そういえば、経験豊富なあたしの母さんは、過去にサーカスに行き、ピエロという生き物に会った事があるという恐ろしい話もしてくれていた。

「サーカスくらい知ってるよ」

あたしはそう言って、ふと考えた。母さんが昔行った事があると言っていたサーカス。たしか、やっぱりこの街の外に張られたテントでだったと言っていた。母さんが昔見たことのあるサーカスというもの。ちょっと見たいかもしれない。

「見てみたいかもなあ……」

あたしがそう呟くと、野良犬が苦笑した。単にあたしをバカにした笑いではなく、自虐的なものにも見えたので、あたしはしばし彼

を窺ってしまった。

「無理無理。絶対無理だよ」

「なんで？ 分かんないじゃん。行けるかもしれないし」

「無理だよ。だって、入場料に、青の札が五枚か、銅色の札が一枚いるっていったもん」

つまり、青の札が五枚か銅色の札が一枚というと、銅色の小銭が五百枚だから……この掃除を五十日だ。ふむ、ほぼ二カ月働けばいいのか。それを一回のサーカスという夢に投じるか、その分貯めたお金でもっと違う事を小出しに経験するか。

どっちがいいかなんて選択権もなかった。

「所詮、家持ちの人たちのためのものかあゝ」

あたしはそう呟いた。

野良犬はしばらく黙ってから、「ただしくは金持ちだな」と、呟いていた。

あたしは溜め息を吐いて、少し溶けかけているアイス様を再び頬張った。

4. うわさ

4.

そうそう。そういえば、前に野良犬との関係についてだけど、なんでよく血で血を洗うようなケンカをするのに、仕事とか違う日は何事もなかったように平和なわけ？ と、野良生活者でない友達に言われた事がある。

そうか、カタギの方々は首を傾げる所なのか、とあたしもそこでやっと気付いたものだった。簡単に言えば、あたし達は私怨で仕事をふいにするほど余裕がないっていうことだ。というか、どんなに普段仲が良くても、仕事上敵同士になる場合もあって、そうなら仕事中は本当に敵対しなきゃならないわけだ。でも、飽く迄それは仕事している間だけで、仕事が終わってしまえば、また元の仲良しに戻れるのが、野良生活者の一般常識らしい。まあ、これは、先に野良生活をしていた大人達から教えてもらった道徳なんだけどね。まあ、そんなわけで、たとえ、前の日にあたしがバカにしつくし、あっちもあっちで血だるまにしてやんよとばかりに追いかけてきたようなケンカをした時でも、仕事が一緒となったら一旦それはリセットされるわけだ。いかにバカな野良犬とは言っても、そういう常識は弁えているもので、そうでなければ、今頃大人の野良犬達に追い出されているものだ。

野良犬も、もっと取っつきやすい奴だったらねえ、なんて思いながらあたしは銭湯を去ったものだった。仕事は終わっちゃったわけだから、その後またはち合わせてケンカになったら、前の日みたいな事になるんだろうな、と。

まあ、だいたい暴力沙汰になるのは、野良犬の機嫌が悪い時ぐら이다。あたしがスマートな性格をしているから、暴力なんて言う野蛮な手段なんて頼らないってことをモットーにしているわけだ。

（そのわりに、きつかけを作るのはアカリなんだよね）

クラガリにそう指摘された日もあったっけね。ともかく、そういうわけで、あたし達野良生活者の価値観では、普段ケンカしているっていう事実と、一緒に仕事をして一緒に雑談をするっていうことは、全く別の次元のお話なわけだ。簡単に言えば、昨日あった事なんて、さっさと水に流すべきこと、ということだろうか。

（うん、きつと、そういう事だろうね。水に流すって言うのが、アカリみたいな生活をするうえでは大事なかもね）

「まあ、そう簡単に水に流せないこともあるんだけどねえ」

そんなことを、クラガリと語り合いながら、その日もあたしは仕事をしていた。仕事って言っても、お手伝いみたいな感覚で、けれど、しっかりと責任をもって務めていた。内容は、薬屋から、駄菓子屋まで薬を届けると言う仕事。

「ねえねえ、アカリちゃん？」

駄菓子屋のおかみさんが、薬屋へと戻ろうとするあたしを呼びとめた。

ちなみに、こうも頻繁に薬屋から薬の配達をするのは、野良生活を営んでいる者の中でも、あたしや、子狐と呼ばれるとあるとつつあん坊やぐらいだ。歴史あるこの薬屋において、そんな大事なお仕事を任せられるのは、信用と有能さを買われている証拠だと、憧れのシズミさんが言っていたのを、あたしはしっかりと覚えている。もつと言え、何年の何月何日の何時で、どんな景色でどんな匂いがして、どんなことがあった日とも言えるくらい焼きついている記憶なのだが、今ここで書くと話が絶対に逸れそうだということとは、クラガリに指摘されるまでもなく分かりきっているので、敢えて語るまい。

今はとにかく、そう、駄菓子屋のおかみさんに呼び止められた話だ。

「アカリちゃんは、サーカスに行くの？」

一瞬、ピンとこなかった。サーカスって何だっけ？ とさえ思っ

ていたのだが、そういえば、数日前の銭湯にて、そんな話を野良犬の奴が振ってきたのを思い出して、納得した。そういえば、街の外にサーカスが来ていると言っていたっけね。あれ、まだ来ていないんだっけ？ そのくらい、あたしにはどうでもいいことだった。どうせ、あたしの稼ぎではサーカスなんて観に行けません。

しかし、ここでネガティブな表情を見せることは、あたしの野良生活のポリシーに反することだった。野良生活者は誇り高く、そして、カタギの人達の同情を求める様に図ってはならないというのが、あたしの意識にはあった。まあ、仕事と言い生活と言い、結局、好意に甘えることが多いのだけでも……。

「そういえば、サーカスが来るんでしたっけ？」

あたしは特に何の意図もないように装って、そう返した。

おかみさんはそんなあたしの努力に気づいているのかいないのか、ともかく、気にしない様子で、「そうそう」と話を続けた。

「もうテントは張ってあってね。今週末にはオープンしちゃうらしいのよー。アカリちゃんが行かないのかしら？」

そうですね、と頭を掻くあたし。金が無いといえば、それまでだ。しかしこの状況、そして、この立場、そんな事を言えば、非常にお母さん的なおかみさんが同情するのは目に見えていた。そして、その同情を素直に受け止められない複雑な御年頃のあたしである。

（複雑な御年頃ねえ）

なんか、クラガリが呆れているが、そんなの気にしていたら生きていけません。このクラガリに言われることをいちいち気にしていたら、あっという間に気が狂ってしまうものさ。そんなこと考えながら、あたしは答えた。

「時間があつたら、行こうかなって思っているって感じですかねえ」
考えに考えた結果がそんな答え。ともかく、薬代と少々ばかりのおひねりを握りしめながら、あたしは薬屋さんへと引き返す。道中、このサーカスの話が頭から離れなかったのは言うまでもない。ああ、どうしてこんなにも世間はサーカス、サーカス……。

（本当は行きたいんでしょ？ アカリ）

クラガリだってきつと行きたいんだろうなあ。

（ぼくは全然興味ないんだけどね）

こういうのをひねくれ者って言うのかな。まあ、あたしがサーカスに行きたいって思っているっていうのは凶星で、実は問題なくサーカスを見に行ける人達にすぐ嫉妬しているんだ。ああ、いいなあ、サーカスを見に行ける人達は。もっと安かったらあたしも観に行って、街の人達にもものすごく宣伝してあげるのに。

（そういうのを上から目線って言うんだっけ？）

さて、あんまりのんびりしてたら薬屋さんに迷惑だし、さっさと薬代届けに行こうか！ クラガリの嫌味なんて無視して、あたしは薬屋へと急いだ。信用は早さも命なんだから！

5. 野良仲間

5.

それから程なくして、街全体はサーカスの話題で持ちきりになった。カタギの人達だけじゃなくて、野良生活をしている人の中でも、それなりの稼ぎのある人は観に行ったということも多くて、例えばシズミさんなんかは早い段階で行って来たみたいだった。

いいなあ。あたしもサーカス行きたい。まあ、「サーカスが好きなんだ？」って聞かれたら、「それは、分からないや」って答えることになりそうなんだけれどね。

（サーカスなんて見たことないもんね）

そう。クラガリの言うとおりだ。前もいったとおり、母さんが教えてくれた話とか、昔学校に通っていた時に読んだ絵本とかからイメージしていたのは覚えているのだけど、実際観た事なんてない。知ってるって野良犬の奴には言ってしまったけれど、やっぱりサーカスを観たことある人との会話には、ついて行けなかった。

そんなわけで、サーカスのここがいいから観てみたいというような明確な動機なんて一切ないわけだ。ただ、たくさんの人が観に行っているのに、あたしはまだ観ていないっていうこの状況が、結構辛いものだった。この心情は、あたしだけじゃないらしい。同じようにまだサーカスを観に行っていない人の中には、あたしみたいなことを考えて日々溜め息をついている人もわりといるらしい。

そんな世の中だからか、最近は今まであまり話したこともないような野良仲間と話すようになった。

まずは、野良兎と呼ばれている背の小さな女の子や、その子と一緒に暮らしているという兄貴分の野良狐、だいたい近所のねぐらにいるという野良熊のお兄さんとは、特によく話している。話の始まりはやはり、「サーカス観にいけましたか？」である。そこから誰

誰はもう行ったらしいだとか、誰誰はもう〇回目らしいだとか話して、そのうちに最近の出来事や、景気についての話題へと移っていく。

他にも、今まで猫集会では顔を合わせていたものの、あまり喋る機会のなかった同じ野良猫のお姉さんとも仲良くなった。彼女とは、通り名まで交換する仲となってしまった。お姉さんはスピカというらしい。すごくかっこいい名前。

（対してボクはクラガリか……）

名前ってかっこいい、可愛いとかじゃなくて、その人にぴったるかどうかってのが大切なんだとわたしは思うんだ。スピカお姉さんはというと、スピカっていう名前がものすごく似合うぐらいかっこいい人である。その上、仕事も出来て、シズミさん猫バージョンってくらいの人だとも言われているらしい。なんでそんなスピカお姉さんがサーカスを観に行けないかと言うと、仕事や交友の関係上、何かと出費が多くて、また時間も取れなくてサーカスに行けないんだと言う。

「集会を一回ぐらいサボって観に行きたいくらい気になっているんだけれどね。まあ、お金も足りないし、そもそもこの時間にはサーカスやってないみたいだしね」

と、スピカお姉さんは苦笑しながら言っていた。

ああ、この麗しなお姉さんまでもが観にいけないのだから、あたしなんて一生サーカスには行けないんじゃないだろうか。なんて思っただけだった。

そして、一番ショックだったのは、同じくらいの年齢だから、同じくらいの稼ぎだろうとずっと思っていた野良猫のクロクマが、あたしとは比べ物にならないくらい早く、サーカスを観に行ける身分になっていたことだった。

「ぶっちゃけ空中ブランコよりも、プードル犬の自転車扱ぎとか、ピエロの目隠しフーセン割りとか、虎とかライオンの曲芸が面白かった」

ぼそりとそう言う彼。

なんだよ空中ブランコって！　なんだよプードルの自転車扱ぎって！　なんだよピエロの目隠しフーセン割りって！　なんだよ虎とかライオンの曲芸って！

言っても仕方がないし、相手も言われる筋合いのない文句つてものが生まれてくることはよくある。あたしはそれを噛み砕いて飲みこまなきゃいけない。そう思ったので、綺麗に飲みこんで、クラガリに全部消費してもらった。

（もうお腹いっぱいだよ。観にいけなくなたって死ぬわけじゃないんだから）

クラガリはそんな文句を言っていた。

ともかく、色んな意味で、街の外に來たサーカスは、あたしの生活に確実に入り込んできていた。お手伝いに行った家でもその話題。町中で出会う野良仲間との会話もその話題。さらには、ぼんやりと歩いている道端で耳に入ってくる会話もその話題ときたもんだ。

ああもう、皆、サーカス、サーカスって！

サーカスん家の子になっちゃえばいいのにー！

（いや、意味分かんないから）

クラガリに冷静に突っ込まれた。こいつはフィーリングってものを知らないんだ。考えるな。感じる。

そんな投げやりな思考の中で、あたしは今日も薬屋さんの手伝いをしていた。この薬屋さんは本当に配達を頼むのにあたしを選んでくれるから有難い。しかも、配達した先ではだいたい薬屋さんに届ける薬代とは別に、あたしにとお菓子とお駄賃を貰ってしまう。遠慮はするが、頑なに貰わないんじゃないや野良生活はやってけない。だから、薬屋さんの手伝いは一番好きな仕事だった。

今日は、胃薬を貸本屋さんに届けるという任務を得ていた。貸本屋さんは九夜街のど真ん中にある。そこへ行くまでのこの耳に入ってくる話題はやっぱりサーカス。まあ、仕方ない。ああいう風に遠くの世界から何かがやってくるなんて、この街ではあまりないこと

なのだから。

あたしは出来るだけ、平常心で胃薬の壺を運んでいた。途中で出会う野良仲間もどうせサーカスの話題を振ってくる。仕事なので、適当にあしらうのが正解だろう。

「よお、バカ野良猫」

（アカリ、ビンゴ）

クラガリが投げやりにそう言った。たった今、仕事モードに入っただこのあたしを呼びとめた思慮の足りない残念な奴。そんな奴、野良犬の奴しかいないだろう。振り向いてみれば、やっぱりそうだった。でも、あたしがすぐに暴言を返してやれなかったのは、そこに居たのがバカ野良犬の奴だけじゃなかったからだ。チンピラのようなお兄さんが二人。派手なお姉さんが一人。彼らも野良犬だ。あんまり知らないけれど、確か、バカ野良犬とそれなりに親しい方々だったと思う。

「仕事か？ まあ、俺と違ってバカ野良猫はいっぱい仕事しないと生きてけないもんなあ」

あれ？ この間一緒に銭湯掃除をしていたのはどこのどいつでしただけ？ そんな感じだったけれど、あたしはノーコメントで溜め息混じりに言った。

「今、仕事だ——」

「俺なんか今からサーカス行くんだぜ、サーカス！」

壺を落としたそうになった。我ながら、落とさないで済んだことだけでも表彰ものだと思う。え、それよりも、何だって？ バカ野良犬が、サーカスを観に行く？ ウソだろ？

（ウソじゃなさそうだね。よく見て、あいつらしい服着てるもん）

言われてみれば、バカ犬を含んだ野良犬さん達は全員、野良生活者にしてはいい服を着ていた。少し格式高いお家にお仕事で行くような服だ。それに、バカ犬はともかく、他の野良犬の方々はそれなりに稼いでそうな雰囲気もある。

「お前、絶対無理だろ？ せいぜい仕事がんばれよ！」

バカ犬は、調子に乗るところが最大の欠点だと思う。と、言い返すこともなくあたしはぽかんとしたまま野良犬御一行を見送った。彼らは確かに、街の外へ出る方向へと歩いて行った。

信じられない。

それが一番の感想。

（まあ、ショックだろうけど、これが現実だね）

クラガリが無駄に追い打ちをかけてきた。こいつ、殴れないかな？
貸本屋への胃薬を抱えたまま、あたしはしばしクラガリを殴る方法を実験に考えていた。

6. 夢のチケット

6.

野良犬御一行がサーカスの来ている街の外へ歩いていく背中をぼんやりと見送ったあの日。

あの日以来、あたしはものすごく仕事に打ち込んでいる。薬屋さんであたしに出来る仕事は全部引き受けるし、それもあんまりなかった時は、帰りがてら違う場所で手伝いをして帰ることも、珍しくなくなってきた。

とにかく、あの野良犬御一行とのあの一件を忘れたくて仕方なかった。すなわち、あいつらがサーカスに行けて、あたしが行けないう言う現実を忘れたくて仕方なかったのだ。

忙しければもちろん、あいつらのことなんて考えなくてすむ時間もあるし、それどころじゃない。けれど、動くのを辞めたら、すぐにあの後ろ姿、あの憎たらしい面、そして、じわじわと湧きあがっていた、あの悔しさを思い出してしまうのだ。

それだけ、あたしはあいつらを羨望していた。それが、あいつらが行けたものに自分が行けないということが悔しいのか、ただ単に、サーカスを観に行きたいからなのかは、自分でも分からなかった。ただただ仕事に打ち込む日々を続けているうちに、次第に、クラガリとの会話数も減っていった。あたしにとって、それはそれはとても静かな毎日だった。だって、朝も昼も夜も、あたしにはクラガリくらいしか喋る相手なんていない。街の人達との会話と、クラガリという分身のような存在との会話なんて、秤にかけるのもバカみたいな程、その違いは明らか。だから、この静かな日々は、とても寂しくもあって、輪郭もあやふやな奇妙な時期だった。

そう。あたし一人で感じているこの世界は、本当に、あたしが思っている通りの世界なのか、不安になってきたのだ。あたしだけが

実感して、あたしだけがその情報を管理しているという感覚が、世界を認知する能力を狂わせてしまうのかもしれない。

あたしはそのくらい、この世界の正確さを疑っていた。街の人達との会話、たまにだけ話しかけてくるクラガリの言葉、そして、嫌でも目に入ってくる野良犬の姿形。五感で取得したそれらの断片的な情報は、本当に、あたしの主観的な概念を遮断した世界を造っているのか、分からなくなっていた。

（アカリ、アカリ……）

声が聞こえてくる。

（ねえ、アカリってば……）

「アカリ……ちゃん？」

声が重なった時、あたしは自分が考えに耽っていた事に気づいて、はっとした。ここはかのパラダイスのような銭湯の番台。おぼちゃんを前にして、あたしは、自分が、自分でもわけの分からないことを延々と考え続けていたことにやっと気付いた。どうも、最近は頭がぼうつとして、その先は、意味のないこと、脈絡のないこと、そして、理解しがたいややこしい事を考えてしまうようになっていて。そういえば、クラガリがあまり話しかけなくなってから、酷くなってきた気がする。

（アカリ、ボクの話、聞いて……）

「アカリちゃん、疲れているんじゃない？」

おぼちゃんが心配そうに顔を覗きこんできた。あたしは慌てて、「大丈夫です」と言って、笑顔をつくった。いきなりだったから、ちゃんと笑顔になれているかは分からないけれど、どうにかなったと思う。その証拠に、おぼちゃんは「そう？ それならいいんだけれど」と言って、今日のお駄賃と数枚の紙切れを一緒に渡してくれた。

「あの……これは……？」

最初、それは映画のチケットに見えた。見たい映画のポスターの絵柄にそっくりだったから、そう見えたのだけれど、書いてある金

額がおかしかった。異常に高いのだ。よくよくその書いてある内容を見て、あたしはびっくりした。

「え……これ、貰っても……？」

「私は何度か行ったからねえ。たまたま貰ったものだから、そんなに気にしないでいいのよ。余った券は誰かにあげちゃってくださいな」

おばちゃんから貰ったもの、それは、サーカスの入場券だった。

本当にびっくりだ。そして、おかしかった。あんなに野良犬達に嫉妬して、仕事に打ち込んでいた自分が哀れで情けない。ちよつと恥ずかしいし、少しほっとした。

「……何が『お前、絶対無理だろ』だよ」

あたしはあのバカ犬のまぬけ面を思い出して、鼻で笑ってやった。あいつがこのことを知ったら、どういう反応をするんだろう。でも、まあ、あいつのことだから、それでも俺の方が先に観たもんなどかいいだすんだろうな。あいつのことを考えたって仕方ない。せつかく貰ったサーカスの券が汚れるだけだ。

「ん？ アカリちゃん、なんか言ったかい？」

「いえ、何も言ってないですよ。あ、あの、ありがとうございます！
また、何かあったらお手伝いいたします！」

あたしは精一杯の敬礼で、その場を後にした。

（アカリ、すごいね、サーカスだよ！）

道中、クラガリがそんな事を言っていたけれど、あたしにまともな返事をする余裕はなかった。でも、クラガリの言うとおり、サーカス……サーカスだ！ あたしがサーカスを見れる日が来てしまったんだ。チケットを握る手の汗を感じて、自分自身、こんなにサーカスを見たがっていたなんて、って思う程、あたしは興奮していた。「アカリちゃん、なにかあったのかい？」

家具屋のおばさんが声かけたけれど、それにもなおざりにしか答えることもできず、いそいそとねぐらへと向かった。どうしようっていう気持ちばかりが、あたしの頭の中にあった。

あたしが、サーカスを見に行けるなんて、信じられない。

7. サーカス

7.

まだ信じられなかった。このあたしがサーカスを観に行けるなんて。でも、何度、目を擦っても、チケットはやっぱり手元にあって、夢じゃないんだってことがだんだんはつきりとしてきた。

なんてたって、憧れのサーカスだ。

家持ちの人から見たら、こんなゴミくずみたいなものにまみれて暮らしているこのあたしが、あんな高い料金を払わなくても、サーカスに行けるんだ。なんて運がいいんだろう！あたしの興奮は当分さめなさそうだ。今まで生きてきた中でも、全ての優越感があたしの中にそそがれているかのようにだった。

（サーカスって、そんなにいいものなの？）

クラガリがそんな事を言っていたけれど、あたしにはそれに構っている暇もなかった。チケットを貰って以来のあたしがやることといたら、今まで譲り受けるなりなんなりした精一杯の洋服の中から、とびきりお洒落なコーディネートを編み出して、それを着てサーカスに行くという事くらいだった。そして、その日は今日。報酬にサーカスのチケットだなんて、ちょっと豪華すぎるんじゃないだろうか。

あたしは、一番気に入っているワンピースを着て、住まいを後にした。野良猫のあたしが町に出るまでに汚れはしないと心配だったけれど、普段から通っているだけ、汚れることはあまりなかった。そういえば、汚れる事なんて、今まで気にした事もなかった事に今気付いた。こういう時だけ気になるなんて、おかしいものだなって思う。ワンピースはちっとも汚れないで済んだ。後は、サーカス会場へと向かうだけ。幸いなことに、野良犬の奴にも会わないで済んだ。クラガリ以外には茶化される事もなく、あたしはモチベーション

ンを誰にも下げられることなく、サーカス会場へ行くことが出来た。会場はまるで遊園地みたいだった。遊園地の中にサーカス会場があるという感じ。所々に風船配りの道化師がいて、がやがやとしている。あたしのよく知っている街でも見かけないような人々が集まってきた。そうだ。ここはあたしの住み慣れた街の外なのだから、当たり前なんだ。

（風船を配っているあのピエロの男、知っている）

突然、クラガリが奇妙な事を言った。

（アカリもよく知っている人だと思うよ）

あたしの知り合いに道化師なんていないと思うけれど、クラガリの言う事だから少なからず気になった。でも、やっぱりその道化師は他の道化師と変わらない。あたしはその脇を素通りして、テントの中へと入っていった。テントの中は、仕切られているのが奇妙なくらい広かった。寧ろ、仕切られていない外よりもずっと広く見える。不思議だった。どうして、仕切られていない場所よりも広く感じるんだろう。あたしが座っているよりもはるか下に、ステージがある。たくさんさんの骨組みに支えられたテントは、古びているようにも見えるけれど何処か近代的で、広すぎる天井から吊り下げられたブランコは、それだけで一つのアバンギャルドなアートだった。

（これがサーカス？ 何だか悪魔的だね）

クラガリの感想は別に嫌味を込めているものでもなく、素直な感想だった。あたしは今から始まるスペクタクルな世界を楽しむに、身体がそわそわと落ち着かないのを必死に抑えながら席について待っていた。クラガリの感想は尤もなことだったけれど、それでも、サーカスに対する憧れと楽しみな気持ちは全く治まらない。あたしは、サーカスが始まるのをじっと待っていた。

（動物の声が聞こえる。皆、プロ意識が強いみたいだね。辛さに耐えながら、生きるために頑張っているんだ。そういう意味で、野生と一緒になんだって）

何処で誰の声を聞いているのかは分からないけれど、クラガリは

一人でそんな事を言っていた。でも、あたしの耳にクラガリの言葉なんて入りこまなかった。とにかく始まるのが待ち遠しくて仕方ない。段々と客席は埋まっていく。いよいよ始まるんだ。あたしの待ちに待った時間が、今から始まるうとしているんだ。これが、ショータイムの世界を包み込んでいる空気というものののだろうか。あらゆる劇場の中には、精霊や神様がいるという話を聞いたことがあるけれど、もしかしたら、今のあたしが感じているこの雰囲気のことなのかもしれない。

あたしは息を飲みこんで、自分を落ち着かせていた。

大きなステージがあたしを見上げている。明りが点滅し、反転し、あたしの視界を色取り取りの模様で飾っていく。そして、音楽。夢の世界がそのまま再現されているかのような場面に、あたしは恍惚としていた。ああ、もう始まるんだ。始まっているんだ。

(幻想に包まれる世界。すべては……)

クラガリの声も、この音楽とこの色に呑みこまれていくあたしの全ては今この場に支配されていた。もうこの空間のことしか感じることは出来ない。それくらい、あたしはこの世界に呑みこまれていた。壮大な音楽と一緒に、行進が始まる。あたしは広すぎるステージの一部になりきって、全てを見守った。はらはらするし、どきどきする。妖精のような少女が、魔法で召喚されたかのように現れて、ステージの中央に立って、音楽と共にステージ全体を指差す。その瞬間、オーヴァチエアが完成した。

始まった。始まったんだ。

あたしの頭は最も単純な働きしかしない。

待ちに待った時が、来た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4222l/>

LIFE OF のらねこ

2011年9月8日03時24分発行